

開催地名：群馬県高山村	
開催日時	令和元年 11 月 17 日（日） 09：00 ～ 10：30
開催場所	高山村役場
語り部	宮本 英一 （千葉県旭市）
参加者	役場職員、地域住民、関係団体 約 90 名
開催経緯	今まで、大きな災害の経験が少ないため、住民・職員ともに災害への関心や危機意識が低い傾向がある。講師の方に災害の怖さや、そこから得た教訓を講演いただく事で、決して人事ではないことを認識し、防災意識の高揚に期待したい。
内容	（１）はじめに 私は、千葉県の北東部、九十九里浜の東の端にある旭市飯岡地区で震災に遭った。旭市は平成 17 年に、旭市、飯岡町、海上町、干潟町が合併してできた市で、醤油と漁業のまち、銚子市の隣に位置する、人口 66,500 名程度の自治体である。合併当時、私は飯岡町の職員であった。私の家は九十九里浜の海岸通り沿いにあり、道路を挟んですぐ前が砂浜の海岸である。 （２）３月 11 日 東日本大震災 午後 2 時 46 分に大きな地震が発生してから、約 1 時間後に津波が来た。警報が出て津波が来るまでの間、私を含めた近隣の人たちは海岸の堤防から海を眺めたり、区民館の前に行ったりしていた。防災無線では津波からの避難の呼びかけを繰り返し放送していたので、余震が続く中、近隣の人たちは思い思いに荷物を持って、区民館や近くの神社に避難していった。私は、家の前の堤防を越えることはないだろうと判断し、特に避難をせずに海の方をずっと見ていた。小学生のころ発生したチリ地震の時の津波の際も、海岸の堤防を越えることはなかったからである。 予想通り、津波は堤防を越えることはなかった。津波がおさまると、避難した人たちは戻ってきた。私を含めて、誰もが津波はこれで終わりだと判断していた。しかし、これで終わりではなかった。離岸堤防の先まで潮が引いており、防災無線では大津波警報の発令と緊急避難の呼びかけが繰り返されていた。そして午後 5 時 22 分ごろ、津波が私の家を襲い、あっという間に海水にのまれてしまった。水中へ巻き込まれながら、車が流れていく光景が目に入った。木造の家とコンクリートの建物に挟まれた屋根の残骸が見えたので、妻と一緒に無我夢中で屋根の上に上ることができ、何とか助かった。 津波で亡くなった方々や、行方不明の方の多くは、１度目の津波の時は避難していたが、もうこれで終わりだと思ってしまい、家に帰ってから２度目の津波によって流された方がほとんどである。東北地方で発生した津波と比べれば、規模はかなり小さいが、震源地からかなり遠く離れた千葉県でも、津波のよって尊い人命が失われ、大きな被害があったことを知っていただければと思う。

(3) 震災発生後の生活

地震の日の翌日、私は2トンドンプを借りて息子と妻と3人で自宅に向かった。津波の後の海岸道路はシーンと静まり返っていて、海の声も聞こえなかった記憶がある。不思議な感覚であった。自宅の1階部分は足の踏み場もないほどの状態で、何から手を付けていいかわからなかった。廊下の砂を取る作業、床下の泥をすくう作業、散乱している家具を片づける作業等を何日もかかって行った。しばらくは余震も多く、避難命令も頻繁にでたので、その都度標高が高いところに避難した。近隣では、避難所に避難していた間に貴重品やお金を盗まれた方や、テレビを取られた方もおり、落ち着いた生活はできず、この先どうしたらいいのか不安を抱えて毎日を送った。

飯岡地区での津波の被害は海岸線から数百メートル程度だったので、当然被災しなかった方々も多くいた。そのため、被災者が自宅の片づけ等の作業に追われる一方で、被災しなかった住民への対応にも追われることとなり、私自身も市役所との調整等、区長として忙しい日々が続いた。

(4) さいごに

津波に流されて、一番反省している点は、大津波警報が出ても、自分だけは大丈夫だと思い、避難しなかったことである。嬉しかったことは、ボランティアの皆さんなど、たくさんの人たちが家の片づけの手伝いをしてくれたことだ。

大きな災害が起きると、個人や地域に想定しなかった様々な問題が起きる。ここにいる皆さんは、災害発生時には指導的な役割を求められると思うが、自分自身や家族が被災者になる場合もある。どうか、ご自分の家族を守りながら、地域の人たちのためにどういう行動をとったらいいのか、日頃から考えていただきたいと思う。



開催地より

津波の貴重な体験をお話いただき、災害の怖さを認識することができた。当村は山間部であるので、津波の話はとても興味を惹くものであった。住民や職員の災害への関心や危機意識が高まることを期待したい。さらに、決して人事ではないことをそれぞれが認識することで、今後の防災活動に役立てていきたいと思う。